航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR

ミコヤン／グレビッチ
MiG-1～3

☆特集☆
嘉手納空軍基地のF-4ファントム部隊
エアライン機長への登竜門航空大学校
4 ci/40用中級RC練習機"ファーマー"

'73 JANUARY 1

$2.50

嘉手納基地のファントムII部隊

昨年5月から嘉手納基地配備となった第44戦術戦闘飛行隊（44TFS）のF-4C

昨年3月に三沢基地から移駐した第67戦術戦闘飛行隊（67TFS）のF-4D。

1956年8月に初めて嘉手納基地に駐留して以来，同基地には縁の深い第15戦術偵察飛行隊のRF-4C。1966年暮から翌春にかけて，装備機のRF-101を現在のRF-4Cに改変している。

〔上・左・右上〕第44戦術戦闘飛行隊のF-4D。胴体の部隊マークは"バンパイヤーズ"。44TFSの前身は1940年2月、ハワイのホイラー飛行場で編成された第44追撃中隊。大戦中はP-39,P-38を装備して南太平洋戦線で活躍。戦後はP-47, P-51, P-80, F-86F, F-100と機種を変え、F-105でベトナム戦に参戦。

〔右中〕第67戦術戦闘飛行隊のF-4Cで、"ファイティング・コックス"が部隊マーク。67TFSは1941年、ミシガン州のセルフリッジ飛行場で編成され、大戦中は南・中部太平洋、中国戦線をP-39とP-38で闘いぬき、以後44TFSと同じようにP-47からF-105に変えて、ベトナム戦に参加。

〔右下〕第15戦術偵察飛行隊のRF-4C。胴体のマークは第18戦術戦闘連隊（18TFW）のエンブレム。15TRSは1次大戦中の1917年5月、ニューヨーク州のミネオラで編成された第2航空学校がその前身。1923年に第15観測中隊となって、偵察部隊の第一歩をふみ出し、大戦中はフランス沿岸の観測などに活躍。戦後はRF-80, RF-84F, RF-101を装備して、朝鮮、ベトナム戦に参加している。

嘉手納基地のC-124とHH-3E

〔上〕嘉手納基地で整備中の"老兵"C-124グローブマスター輸送機。第945空輸大隊（945MAG）の所属機。〔下〕同基地に駐留して救難の任についている第33航空宇宙救難回収部隊のHH-3Eジョリーグリーンジャイアント・ヘリコプタ。はげかけた塗装に"歴戦"のあとをとどめている。

ベトナム戦のファントムII

"ウイリアムテル'72" のF-101ブードー

9月18日から29日にかけて，フロリダ州のテンダル空軍基地をホーム・ベースとして開催された1972年度“ウイリアムテル”競点射撃大会には，ADF（航空宇宙防衛軍団）とANG（州空軍）の各飛行隊12チームが参加，F-101，F-102，F-106の射撃機48機が出場したが，これはそのなかのF-101ブードー。

〔前ページ〕ノースダコタ州空軍の第178戦闘飛行隊チームの射撃機。〔上〕地元テンダル基地にあるADFの防空ウェポン・センター所属機。〔下〕これもノースダコタ州空軍の第132戦闘中隊チームの射撃機。ともになかなかはなやかな尾部マーキングである。

(Photos by Mr. Roy Look)

〔左ページ・上・下〕“ウイリアムテル'72”にはカナダ空軍のF-101部隊も参加した。写真はその第425全天候戦闘飛行隊（425AWFS）所属機。

カナダ空軍では1965年大会で初めてF-101チームを参加させているが、次回の1970年大会にも出場させて、いまでは“ウイリアムテル”の常連。赤い“かえで”のマークは、大会に国際色をそえている。これまでF-101の部の優勝はANGチームが独占。今年もノースダコタ州空軍の第178戦闘飛行隊が栄冠をにぎった。　　(Photos by Mr. Roy Lonk)

英国の航空博物館訪問 ④　　帝国戦争博物館　　*Imperial War Museum*

上：ハインケルHe162Aザラマンダー・ジェット戦闘機。写真の機体は第1戦闘大隊（JG1）の塗装をしている。この博物館はドイツ機の展示が多く、Fw190、Me163やV-1、V-2号ミサイルなどもある。そのほかカナダ軍関係では小型潜水艦、戦車や[illegible]の断面模型なども保管されている。

YA-7HコルセアII

去る8月29日にダラスの海軍航空基地で初飛行したコルセアIIの複座練習型YA-7H 1号機。写真は同日，初飛行のために同基地内のボート社工場前に引き出されたところ。初飛行では高度17,500フィート（5,334m）まで上昇，560ノットで飛んだ。

ロッキードS-3Aバイキング

サンクレメント島近くの海上でテスト飛行中のS-3Aバイキング艦上対潜哨戒機。S-3Aは原型8機がつくられることになっているが，これまでに4機が完成してテストをつづけている。写真の機体は4機のなかで初めてコンピューター式の対潜電子装置を備えた機体。濃霧のなかに見えるのは米海軍のミサイル駆逐艦である。

S-3Aのテスト飛行は20カ月間にわたって行なわれるが，4機の飛行時間はこれまで450時間に達している。残り4機は19

ジャガーGR.1原型

来年から実用段階に入るジャガー。イギリス空軍，フランス海空軍用の各型の製作もピッチがあげられることになった。

ジャガーGR.1原型

来年から実用段階に入るジャガー。イギリス空軍，フランス海空軍用の各型の製作もピッチがあげられることになった。写真の機体は8機造られたジャガーの原型のうちの7号機S07。イギリス空軍の単座攻撃型GRMk.1の原型で，イギリス製の航法・攻撃システムのテストを行なっている。写真では750ポンド爆弾を装備して飛行中。なおこの07号機は最近，機首を改造して，レーザー照準器を装備している。

ジャガーGR.1生産1号機

〔上〕英空軍向けのジャガーGR.1の生産1号機が完成, BACのウォートン工場でエンジンの地上テストに入った。200機納入されるうちの1号機で, 73年夏には軍に引渡される。エンジンまわりのカバーをはずし, インテークにはスクリーンを張って始動の準備をしている珍らしいスナップ。

西ドイツ空軍のCH-53G

西ドイツの陸軍と空軍が合計135機装備することになっているシコルスキCH-53D（G）ヘリコプタ。写真は空軍に納入された2機で, 今年中に17機, 来年中に47機, 74年中に46機がつづけて引渡される。最初の2機はシコルスキ製, 20機がノックダウン生産, 以後はVFWフォッカーで国産される。

A300B初飛行

ヨーロッパ共同開発のエアバスA-300Bの原型1号機が，去る10月28日，予定よりも1カ月早くツールーズのブラグナック飛行場で初飛行に成功した。初飛行は1時間25分にわたって行なわれ，飛行中に自動操縦装置や降着装置の出し入れなどのテストも試みられた。来年初めには原型2号機もテスト飛行に加わり，3，4号機も同年内に飛行する予定である。

Tu-144の生産1号機

〔上〕ソ連のSST Tu-144の生産1号機。写真は去る9月20日，モスクワを発って路線運航テストに飛んだときのもので，タシケント空港に到着したところ。同行程を110分で飛行したという。原型にくらべて大きな変更はないが，折り曲げられた機首の部分の窓をふやして，視界を改良している。

中国向けのトライデント

〔下〕中国から12機の発注を受けているホーカーシドレートライデント2Eの1号機。ロンドン近郊のホーカーシドレー社ハットフイールド飛行場を飛び立って，テスト飛行中のもの。テスト飛行は10月末から開始されており，今年末から順次納入されることになっている。

マレーシアとケニア空軍の
ブルドック

先月号につづいて，スコッテイシュ・エビエーション ブルドック。写真上はマレーシア空軍から15機発注されているモデル12，納入前のテスト飛行中のものである。写真下はケニア空軍向けのモデル103。プレストウイック飛行場で，引渡しを待っているところ。ケニア空軍では5機を装備する。

キングエアE90とデュークA60

〔上〕これまでに500機以上が売れている6/10席の双発ターボ・プロップ機ビーチ キングエアの最新型モデルE 90。1973年型として最近発表されたばかりである。〔下〕同じくビーチの4/6席の軽飛行機デュークA60。モデルA60は昨年から売り出されたもので，エンジンまわりなどが改良され，RCAアビオニクス装置などを標準装備としている。デュークはこれまでに150機余が生産されている。

嘉手納基地のファントム部隊

第15戦術偵察飛行隊（15TRS）のRF-4C。

F-4 PHANTOMS AT KADENA AB, OKINAWA

ついさきほど、B-52が突如飛来して話題となった沖縄の米空軍嘉手納基地。これはその1週間ほど前、10月中旬に訪問してカメラでのぞいた同基地のファントムIIである。まだ海水浴ができる暖かさ。蒼が突しいぬけるような沖縄の空。さんさんたる陽光に照らされて、3個飛行隊分のベトナム迷彩機が地をはうように、エプロンにずらりと並んで待機していた。

ただいま同基地に配備されているファントム部隊は、第18戦術戦闘連隊（18TFW）傘下の第15戦術偵察飛行隊（15TRS）、第44戦術戦闘飛行隊（44TFS）、第67戦術戦闘飛行隊（67TFS）の3個飛行隊。15TRSがRF-4C、ほかはF-4Cがその装備機である。

〔上・下〕ZLのテイル・レターをつけた第44戦術戦闘飛行隊のF-4C。この飛行隊は昨年6月まで横田基地に駐留していた第36戦術戦闘飛行隊の隊員と機材を組み入れて編成された部隊である。第44戦術戦闘飛行隊の名称は、昨年6月までF-105を装備してタイ国のコラト空軍基地に駐留していた部隊のもの。昨年6月30日付で、36TFSの隊員と機材をひきついで、ここ嘉手納基地の第18戦術戦闘連隊の傘下となっている。

〔上・右・下〕ＺＺのテイル・レターをつけた第15戦術偵察飛行隊のＲＦ-4Ｃ。飛行訓練前の点検中のスナップである。

第15戦術偵察飛行隊は、８ＴＦＷの三つのファントム部隊ではいちばんの古参。米空軍の戦術偵察機の主力ＲＦ-4Ｃを装備しているのは 極東ではこの15ＴＲＳのみ。三沢基地に駐留していた第16戦術偵察飛行隊のRF-４Ｃが本国のショー基地に引きあげてしまった現在では，この方面の戦術航空部隊の“眼”として重要な任務を負っている。

ZG
570

〔上・左・下〕テイル・レターZGの第67戦術戦闘飛行隊（67ＴＦＳ）のＦ-4Ｃ。この飛行隊は、昨年３月、横田基地から移動した第35戦術戦闘飛行隊の隊員と機材に、三沢基地に駐留していた第67戦術戦闘飛行隊の名称を冠したもので、３月15日付で18ＴＦＷの傘下となっている。

〔右上〕基地の一隅に駐機していたＣ-124Ｃグローブマスター。本機は、いまではもう珍らしい存在。

嘉手納基地には、戦術空軍のファントム部隊のほかに、ＳＡＣの空中給油機、ＭＡＣの輸送機なども常駐している。

〔右〕迷彩塗装の救難ヘリ・ＨＨ-3Ｅ。この基地に駐留している第33航空宇宙救難回収部隊の所属機である。

〔上・下〕ＳＡＣ（戦略空軍）第376戦略航空団のＫＣ-135Ａ空中給油機。このほどＢ-52がグアム島からの飛来したときは、かげの力となって大いに働いている。

〔下〕定期便としてＣ-141とともに毎日のように飛来しているＭＡＣのＣ-5Ａギャラクシー。この基地にはこの空輸部隊を支援する第603空輸支援隊が駐留している。

アメリカ防空軍団の競点射撃大会

ウイリアム・テル

WILLIAM TELL '72

アメリカの航空宇宙防衛軍団（ＡＤＣ）の各飛行隊が日ごろのウデをきそう競点射撃大会。72年度"ウイリアム・テル"が去る９月18日から29日まで、フロリダ州のテンダル空軍基地をホーム・ベースとして開催された。これはそのスナップ・ショットである。［上・下］最も多く参加したF-106デルタダート。上はミサイル発射の瞬間。

(USAF Photos)

"ウイリアム・テル'72"参加チームは、日ごろの訓練の成績を参考にして選びぬかれた精鋭飛行隊ばかり計12チーム。

F-106部隊はADCの第2、第5、第87、第95、第318、第460戦術迎撃飛行隊の6チーム。F-102デルタダガーの部隊は、州航空隊（ANG）の第134、第176戦闘飛行隊とグリーンランド／アイスランド方面の防空の任についているADCの第57戦闘迎撃飛行隊の3チーム。

F-101ブードーを装備した部隊は、ANGの第132、第178の2チームとカナダ空軍から第425全天候戦闘飛行隊が参加した。

〔左上〕F-106部隊の優勝チーム第460FISのメンバーたち。同飛行隊はノースダコタ州のグランド・フォーク空軍基地から参加。

〔左下〕F-102の部で優勝したウイスコンシン州航空隊の第115戦闘大隊第176戦闘飛行隊チーム。

〔下〕参加機オンパレード。手前の2列がF-106、後方左にF-102、右側にはF-101が並んでいる。

〔上〕競点射撃大会開
のテンダル空軍基地の
ロン。フロリダ州パナ
シテイの近くにある同
は、ADC（航空宇宙
軍団）の防空ウエポン
ンターのホーム・ベー
もある。

〔下〕標的ファイアビーに命中させた直撃弾の弾痕を調べるフランクP.ウオルター少佐。第2戦闘迎撃飛行隊チームの1員として参加した同少佐は，このジェット・ターゲットに直撃弾をあびせて，本大会第1のシャープ・シューターの地位を獲得。標的を節約するため，この競技会で使用する弾頭には炸薬をつめていないので，あたっても穴があくだけ。

〔上〕F-101ブードーの優勝チーム，ノースダコタ州空軍の第119戦闘大隊第178戦闘飛行隊のメンバーたち。

〔下〕カナダ空軍第425全天候戦闘飛行隊チームのF-101。F-101はフアルコン・ミサイル，ジェニイ・ロケット弾などで覇をきそった。

〔上〕木更津駐とん地の航空祭に米海軍から参加したP-3Bオライオン。米海軍では、このほかC-1輸送機なども展示して、しばらくぶりの航空ショーにつめかけたファンたちを喜ばせた。
〔右〕去る10月7日、横須賀港で一般に公開されたオーストラリアの空母メルボルン。甲板上はS-2Eトラッカー対潜哨戒機。

〔左・下〕同じ
空母メルボルン
上のウェスト
ド・ウェセッ
MK, 31ヘリ
タと下の写真
-4Gスカイホ
オーストラリ
軍では、本機
機装備してい

グラマン F6F-3 ヘルキャット艦上戦闘機

グラマン ワイルドキャット戦闘機

（上）空母エンタープライズ（CV-6）の飛行甲板に並んだグラマンF4F-3。撮影は1942年3月4日で，国籍マークは真中に赤丸つきの古いものだが，非常なオーバー・サイズで画かれており，機体番号11の機体のは翼弦からはみ出しているし，機体番号8の機体のように，オーバー・サイズのマークの下にスタンダード・サイズのマークがあるなど，大変なスター・マークである。
（National Aruhaives Photo）

（右ページ）カリフォルニア州のモハーベ海兵航空基地上空を飛行するF4F-3。-3はF4Fシリーズの最初の量産型，合計285機が生産されており，武装としては主翼に12.7mm機銃4挺を装備している。塗装は上側面ノンスペキュラ・ブルーグレイ，下面ライトグレイ。
（USMC Photo）

〔上〕空母ブロックアイランド（CVE-21）に着艦・停止したジェネラル・モータスFM-1ワイルドキャット。着艦フックは，まだアレスティング・ワイヤにかかっているのに注意。この機体は1944年初めから大西洋方面での対潜作戦に従事していたため，機体は低視度迷彩（low visibility paint scheme）と呼ばれる塗装になっており，これは胴体背面と主尾翼上面がノンスペキュラ・ダークガルグレイ，（FSC 36231），側面ならびに下面はノンスペキュラ・インシグニアホワイト（FSC37875）という戦闘機として異例の塗装である。なお，写真は1944年5月初めの撮影で，このブロックアイランドは同年5月29日に撃沈されてしまった。（National Archaives Photo）

〔下〕サイパン島のFM-2。FM-2はワイルドキャット・シリーズでもっとも多く生産された型で，垂直安定板が高くなっているため容易に識別できる。機銃は12.7mm×4で，F4F-4より少ないが，主翼下面に6基の5インチHVAR用ラックが付けられている。塗装は全面グロッシー・シーブルー。（USMC Photo）

〔上・下〕1941年に陸・海軍合同で行なったウォー・ゲーム（総合演習）に参加したF4F-3。上の写真は南ルイジアナ州上空を飛行中のもので，3機とも両翼上下と胴体左右の合計6カ所に赤い十字のマークを書いている。塗装は全面ライトグレイ。

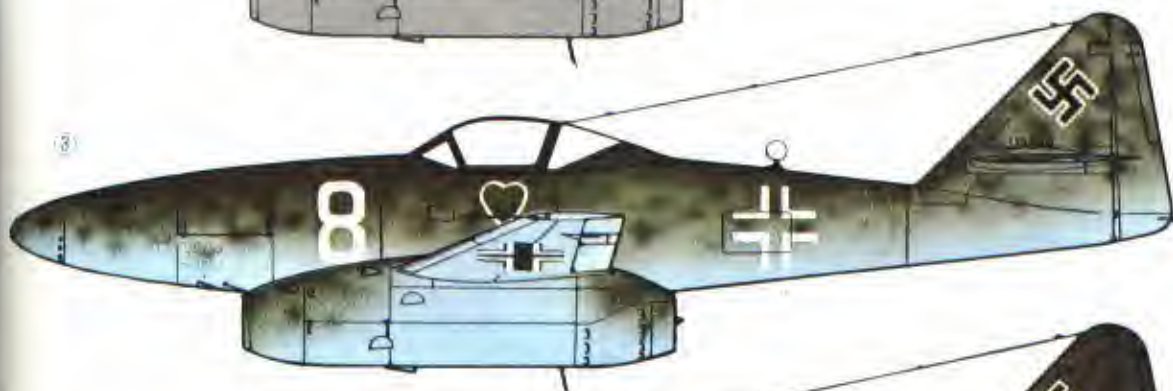
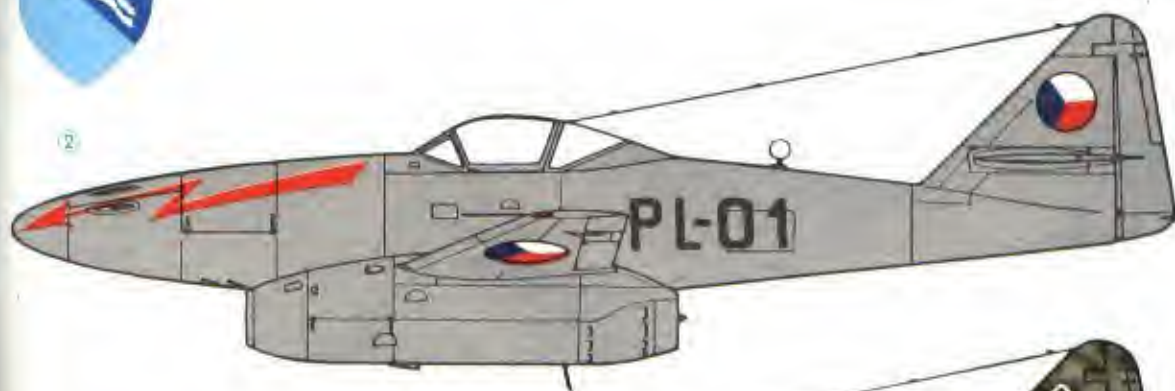
①② S-92, CZECHOSLOVAKIAN-ASSEMBLED Me262A-1 EMPLOYED IN HIGH SPEED RESEARCH.
③ Me262A-1a FLOWN BY MAJOR WALTER NOWOTNY.
④ Me262A-1a OF 3./JG7 "NOWOTNY".

①② S-92. チェコスロバキアで組立て高速飛行の研究に使われたMe262A-1
③ Me262A-1a 第7戦闘大隊司令官ノボトニー少佐の乗機.
④ Me262A-1a 第7戦闘大隊"ノボトニイ"航隊第3小隊の所属機.

①

②

③

④

© A. Hashimoto

メッサーシュミット Me262A-1a

MESSERSCHMITT Me262A-1a

世界で最初の実用ジェット戦闘機として有名な機体で，大戦末期，ドイツ空軍のホープとして大いに期待されたが，実戦であまり活躍しないうちに終戦を迎えてしまった。総生産数約1,433機におよび，A，B，C，D，などの各型をはじめ種々の試作型も作られ，戦闘機型の名称は"シュワルベ"，A-2シリーズの爆撃機型は"シュツルムフォーゲル"と呼ばれた。

☆キット紹介☆

今まではレベルからは1/72のキットが発売中であったが，今度，1/32のビッグキットが新登場した。一連のレベル1/32シリーズのひとつで，英国レベル社が開発したガッチリとした仕上りの優秀キットである。可動部は車輪とキャノピだけというシンプルな構成で，片方のエンジン・ポッドだけターボ・ジェット・エンジンを内蔵している。デカールは1a用の代表的なもの5種つき，大型カラー図が附属している。

☆塗装について☆

図①と② チェコスロバキアのマークをつけた機体で機体の全面がシルバー⑧，機首の左右に赤い電光マークがあり，胴体の文字は黒。

図③ JG 54の指揮官ノボトニー少佐機でキットにこのデカールが附属している。塗装は胴体側面はRLMグレイでダークグリーンのはん点迷彩があり，下面はライトブルー⑳，翼上面はブラックグリーンとダークグリーンのスプリンター迷彩。

図④ これもキットにデカールが附属している機体で3/JG 7の所属機，機体の側面はRLMグレイでダークグリーンのメロメロ迷彩があり，翼上面はブラックグリーンとダークグリーンのスプリンター迷彩，下面はライトブルーとなっている。RLMグレイは㉖ダックエッググリーンと㉗イエローグリーンを混色し白①と黒つや消し㉝でコントロールすると，それらしい色調となる。

(K.Hashimoto)

This is the first jet fighter of the world placed into operational use. It made showy debut as the hope of the German Air Force in the latter part of WWII. However, the war ended before giving the aircraft many chances to distinguish itself. The total number of planes produced reached as many as 1,433 including A, B, C, D production models and some test-manufacture models. Its fighter type was called "Schwalbe" (swallow), and the bomber, "Sturmvogel" (stormy petrel).

KIT:

The Revell company of Britain reacted to the world aircraft kit fans' cheering to the Me 262A-1a of 1/72 series by sending recently another gem in its 1/32 series. In order to feature the German jet plane, devices were simplified as for as possible. And as a result, the turbojet engine is installed only in one side engine pot. A large color figure and five representing decals are attached to the kit.

PAINTING:

Fig. 1 & 2. Noticeable is the Czechoslovakia mark. Totally metal silver, or Revell Color (RC) 8. On both sides of the nose are red lightning marks. Letters on the fuselage are black.

Fig. 3. This is the plane of Major Nowotny, Commander of JG. 54. The decal of this plane is attached to the Revell kit. The sides of the fuselage are RLM gray, with an ink-spot camouflage of dark gray. The bottom surfaces of the fuselage are RC-20, light blue, while the lower wing surfaces are splinter-camouflaged with black green and dark green.

Fig. 4. The Revell kit also has the decal of this plane, which belonged to 3/JG. The fuselage sides are RLM gray with a camouflage of dark green. The upper wing surfaces are camouflaged in a splinter scheme with black green and dark green, and the lower surfaces are light blue. (RLM gray-26 can be obtained by mixing RC-27, egg green, with yellow green, and tone down with RC-1, white, and RC-33, non-glare black.) (K. Hashimoto)

Me262A-1aデータ (technical data)

翼幅 (span) 12.48m，全長 (length) 10.6m，全高 (height) 3.84m，全備重量 (gross weight) 6,400kg，発動機 (engine) ユンカース・ユモ (Junkers Jumo) 004B-3 (900kg) × 2，最大速度 (max. speed) 870km/hr，実用上昇限度 (service ceiling) 11,400m，航続距離 (range) 1,050km，武装 (amament) 30mm Mk 108 × 4，乗員 (crew) 1。

Me262の塗装に必要なレベル・カラー

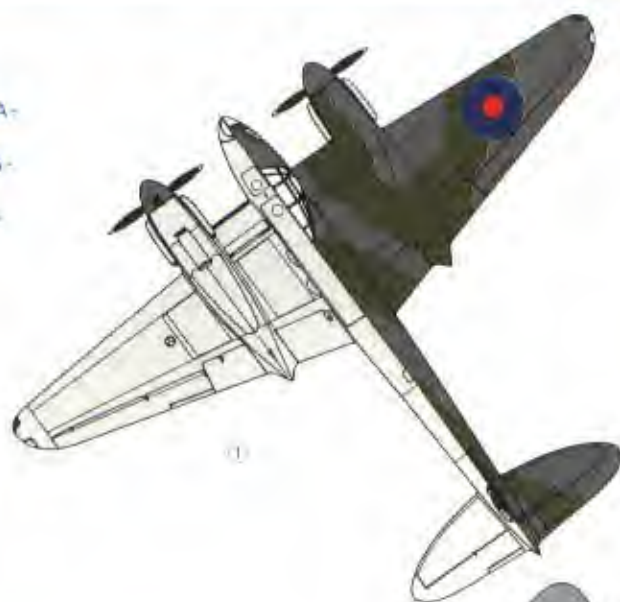
①ホワイト	③レッド
④イエロー	⑤ブルー
⑧シルバー	⑰ダークグリーン
⑲ブラックグリーン	⑳ライトブルー
㉖ダックエッググリーン	㉗イエローグリーン
㉘黒鉄色	㊿フラットベース
㉝黒つや消し	

Me262A-1b戦闘機 1945年4月，ミュンヘン防衛に当っていた第7戦闘大隊第3小隊（3/JG7）所属のMe262A-1B（Wb. No.120140）。胴体背面と主尾翼上面はダークグリーンとブラックグリーンのスプリンター迷彩，胴体側面はライトグレイの地にグレイの不規則な迷彩，下面はライトブルーと思われる。胴体の文字は白のようである。

メッサーシュミットMe262A-1a

写真の機体は以前にデイトンの米空軍博物館に展示されていたことがあり、米軍の手によって塗装されたものである。おそらく全面ライトグレイで、上面はライトブルー[illegible]であろう。

DE HAVILLAND *MOSQUITO B.Mk.*Ⅳ

1. PLANE FIGURE OF 4 AIRCRAFT
2. MOSQUITO Mk.Ⅵ, THE FIRST CANADIAN BUILT MOSQUITO.
3. MOSQUITO B.Mk.Ⅳ OF No.139 SQUADRON.
4. MOSQUITO B.Mk.Ⅴ OF No.105 SQUADRON.

① ③④の機体の平面塗装図
② モスキートMk.Ⅵ(F)(KB300) カナダ製の最初のモスキート
③ モスキートB.Mk.Ⅳ 第139(ジャマイカ)スコードロン所属機
④ モスキートB.Mk.Ⅵ 第105スコードロン所属機

①

②

③

④

© A.Hashimoto

デハビランド モスキートB.Mk.Ⅳ

DE HAVILLAND MOSQUITO B.Mk.Ⅳ

第2次大戦のイギリス機の中で，スピットファイアとランカスターとともに3大傑作機といわれているのが，このモスキートで，全木製双発複座の高速機として爆撃，戦闘，偵察，輸送のほか，機雷敷設からパスファインダー等々，あらゆる任務を見事にやってのけた万能高性能機である。

☆キット紹介☆

レベルのビッグ1/32シリーズのひとつにモスキートMk.Ⅳのキットが新しく追加された。

このキットはモスキートの誕生地英国レベルの新製品で，考証もさすがに優秀，モスキートの決定版的存在である。寸法もジャンボ・サイズであり，可動部は車輪とプロペラだけであるが，左エンジンを内蔵，キャノピのハッチが開閉好みの状態に組立てられ，排気管の防炎カバーも着脱が可能。デカールはBOACが大戦中，中立国との連絡に使用したMk.Ⅳのユニークなマークと第105スコードロン所属のGB-EシリアルDZ353のものが所属，カラー図はBOAC機のものがついている。

☆塗装について☆

図① モスキートMk.Ⅳは残念ながら，それほど塗装のバリエーションがなく，機体の上・側面と翼上面がダークグリーン㉓とダークシーグレイ㉕の迷彩，下面はメデイアム・シーグレイ㉕+①+㉚。

図② Mk.Ⅳのキットで応用できる塗装のバリエーションとして選んだ機体で，全面シルバー⑧の塗装機，スピナとプロペラ・ブレードは黒つや消し㉝。

図③と④ 塗装パターンは図①と同じスタンダード迷彩機で，図③の機体は資料によると，下面スカイ㉔となっている。スピナはダークシーグレイ，プロペラ・ブレードは黒つや消しで先端は黄色，翼端灯は左がクリヤーレッド㊼，右はクリヤーグリーン㊽+㊿で翼端灯の接合断面の一方を塗るとリアルな表現ができる。

(K.Hashimoto)

B.Mk.Ⅳデータ (technical data)

全幅 (span) 16.51m，全長 (length) 12.43m，全高 (height) 4.67m，翼面積 (wing area) 40.4m²，全備重量 (gross weight) 9,454kg，発動機 (engine) RRマーリン21 (Rolls-Royce Merlin 21・1,250HP) ×2，最大速度 (max. speed) 613km/hr 15,180m，実用上昇限度 (service ceiling) 10,300m，爆弾 (bomb) 906kg，乗員 (crew) 2。

The Mosquito was one of the three British masterpiece aircraft during WWII together with the Spitfire and the Lancaster. This twin-engined, wooden-made, high-speed craft gave full play to its genius in all round functions including bombing, fighting, reconnaissance, transportation, mine-setting, pass-finding and etc.

KIT :
A Mosquito Mk. IV kit recently made its debut in the grand British Revell 1/32 series, fully justifying its historical fame as one of the best British aircraft. So an elaborate workmanship would not be obtained by anyone else than Revell, the kit maker in the Mosquito's homeland. In addition to its exquisitness in mechanical research, this kit is also noticeable in its dignified appearance. The wheels and propellers are movable. The left and right engines are exquisit. The canopy can be assembled either in a fixed or opening-free style, and the flame dampers of the exhaust tube are also removable. Accompanying decals include a unique mark which B.O.A.C used for the Mk, IV for the purpose of liaison with the neutral countries and that of GB-E serial DZ353 belonging to the 105th Squadron. The decal of the color-featured Mk. IV is that of B.O.A.C.

PAINTING :
Fig. 1. The Mosquito Mk. IV is comparatively short in color variation. The top and sides of the fuselage and the upper wing surfaces are camouflaged with Revell Color (RC) 23, dark green and RC-25, dark sea gray. The lower surfaces are RC-25, 1 and 30, medium sea gray.

Fig. 2. The illustrator intentionally chose this, keeping the Revell Mk. IV kit newly placed on sale in mind. It is overall RC-8, silver, with RC-33 non-glare spinner and propeller. Easy to get the color variation with a little labor upon the Mk. IV kit now on sale.

Fig. 3 & 4. The camouflage pattern of this aircraft is standard, or similar to Fig. 1. The bottom surfaces of the plane in Fig. 3 are RC-24, sky, according to information the illustrator obtained. The spinner is dark gray. The propeller blades are non-glare black with yellow tips. Wing tip lights are RC-47, clear red. You can get good effect if you paint the "contact section" of the lights in RC-48 and 50, clear green.

(K. Hashimoto)

モスキートの塗装に必要なレベル・カラー	
④イエロー	⑧シルバー
㉓ダークグリーン	㉔スカイ
㉕ダークシーグレイ	㉗機体内部色
㉘黒鉄色	㉚フラットベース
㉝黒つや消し	㊼クリヤーレッド
㊽クリャーイエロー	㊿クリヤーブルー

モスキートTMk.III 上側面はダークグリーンとオーシャングレイの迷彩，下面メデイアムシーグレイ，スピナは黒。フィン・フラッシュは幅24インチ，高さ27インチのもので，主翼上面のラウンデルはタイプAである。写真のT.IIIは複操縦式にしたモスキートの練習型で，第204高等飛行学校など訓練部隊に装備されて，戦後もしばらくのあいだ使われている。

ミコヤン・グレビッチ MiG-1〜3 戦闘機

MIKOYAN—GUREVICH MIG-1〜3

ブヌコボ飛行場のMiG-3。1941年から42年の冬期間、モスクワ方面の防空に活躍した第35ＩＡＰ（戦闘飛行連隊）の所属機である。

A. I. ミコヤンとM. J. グレビッチのコンビが、高性能の単座戦闘機の要望に答えて1940年にI-200の名称で試作したのがMiG-1。1号機の初飛行は40年4月5日。設計から完成までわずか4カ月という超スピードの試作であった。まもなくI-61の名称で量産に入り。1941年初めには部隊に配備されている。〔上・下〕2,100機が量産されたMiG-1。

MiG-1は試作機テスト飛行では最高時速約650kmという高性能を発揮したが、量産機では重量過大などで性能がおち、離着陸や操縦が難しく、実戦ではあまり活躍することなく改良型MiG-3に移行した。

MiG-3はMiG-1のミクリンAM-35液冷エンジンをパワーアップしたAM-35Aにかえ、燃料タンクを増やし外翼の上反角を大きくするなどの改良をしている。1941年2月、I-200の101号機からこの改造を実施している。〔上〕I-200の原型1号機。後方にスライドする密閉式の操縦席風防をつけている。

〔上・下〕実戦部隊に配備されて防空任務についているMiG-3。MiG-3では、胴体下の冷却器がMiG-1のものよりも大きくなって前方にのび、主脚カバーの下半分を胴体下に移すなどの改造もされてた。操縦席風防は再設計されて、後方視界のために座席後方の胴体が切り欠かれている。ミコヤン・グレビッチのチームは、本機の設計でスターリン賞を送られている。

〔下〕木かげの掩体から出動するMiG-3。

［上・右］防空部隊に配備されているMiG-3。上の写真は1942年から43年にかけての冬期間、モスクワの防備についた陸軍部隊を援護して同方面に配備された第12ＩＡＰ（戦闘飛行連隊）の所属機である。第12 ＩＡＰは1941年にＹak-1戦闘機を装備して編成されたが、翌年防空部隊となってMiG-3に機種改編している。なお写真に見える装備機は外翼部分を赤く塗っているが、これは雪上に不時着した場合、発見を容易にするためである。なかには塗装の違った機体もまじっているのに注意。

MiG-3が実戦部隊に配備されたのは1941年夏で、バクー、レニングラード、モスクワなどの防空の任についていた第34 IAP（戦闘飛行連隊）や第233 IAPなどはいち早く本機に機種改変して、それぞれブヌコボ、ツシノ飛行場を基地に、まもなく進攻したドイツ空軍機を迎撃している。

これらの防空部隊は老練のパイロットぞろいであったので本機を難なく乗りこなしているが、ほかの空軍部隊では、訓練の余裕も充分でなく、高速で運動性の悪い本機には容易になじめなかったという。本機でドイツ機撃墜の最初の戦果を記録したのは、2次大戦でソ連空軍第2のエースとなったアレクサンドル・ポクリュスキン大佐であった。

〔上・左〕飛行場の片隅のMiG-3と草木でカムフラージュされた同機。ともに戦後の撮影。本機の武装はMiG-1と変らず、12.7mm機銃1挺と7.62mm機銃2挺であったが、ドイツの戦闘機相手では力不足で、主翼下にロケット・ミサイルや12.7mm機銃を追加懸架する試みなどもされている。そのために重量過大となり、受信機を除したり風防の一部をはずして闘った機体もあった。

〔上〕モスクワ近郊のモニノ市の航空博物館に展示されているMiG-3。機首上面にShKAS 7.62mm機銃2挺の銃口が見える。12.7mm機銃1挺は機首先端に装備されていた。写真の展示機は一部改修されているらしく、主翼下に付けられているはずの主車輪カバーの下半分が見られない。

なお、この博物館は1960年に創立され、MiG-3のほかにANT-2、PE-2、TV-2、LA-7、Iℓ-10、MiG-9などの飛行機とヘリコプタ90機、航空エンジン60基のほか航空航関係の写真と文書約2万点を保管しているという。

〔下〕114ページ上の写真と同じく、モスクワの防空に活躍した第21IAP所属のMiG-3。白一面の雪上に待機しているところ。武装の不足を補って、主翼にはRS-82ミサイルを装備している。

AM-35Aエンジンの生産がまにあわず、MiG-3の量産は1941年末に、約3,300機が造られたところで終了。所期の成果をあげ得ぬまま次第に第一線をのいて、43年頃には空冷エンジンを装備したMiG-5やLa-5と交代して第一線から完全に姿を消したが、一部は後方基地の迎撃機として終戦まで就役している。

未発表 陸軍機写真集

満洲・奉天飛行隊

© 菊池俊吉

Nakajima Ki-44 SHOKIs of No.70 SENTAI Stationed at Hoten Air Field.

奉天郊外飛行場に駐留した飛行第70戦隊の2式単座戦闘機鍾馗。前ページは轟音をひびかせてエンジンを試運転中の2型のラインアップ。太くたくましい機首。"鍾馗"そのままの力強い雄姿である。飛行第70戦隊は昭和16年7月、満洲の東京城で97戦を装備して編成され、関東軍の精鋭航空部隊として19年1月まで満洲の重要都市や施設の防空にあたっていた部隊。昭和18年6月に、写真の2式単座戦闘機に機種改変をしている。

写真上と下は広い列線に駐機している2式単戦。エンジンを始動中の手前の1機は光像式の照準器を付けた2型乙。後方に濃緑色の迷彩をした1機が見えるが、同機は70戦隊第1中隊の所属機と思われる。70戦隊の各機は垂直尾翼に"70"の数字を図案化したマークを付けていたが、このマークは第1中隊が白、第2中隊は赤で、第3中隊は黄に色分けされていた。だだっ広い草原の飛行場。充分な間かくをとって並べられている各機。さしもの"鍾馗"も小さく見える。

写真上は任務を終えてしばし憩う2式単戦たち。70戦隊第2中隊の所属機である。雨露をしのいで、エンジンの部分にはカバーがかけられている。

写真右も同じく列線で翼を休める2式単戦2型。後方の機体には第2中隊のマークが見える。

飛行第70戦隊は、連合軍の北上にともなって本土防空の要が切実となった昭和19年2月、満洲を発して内地に移動、第10飛行師団長の指揮下に入って、20機の2式単戦が松戸飛行場を基地に東部地区防空の任についている。

しかしこの年7月、中国奥地成都からのB-29の来襲が激しくなると、満洲防空のためにふたたび大陸にわたり、鞍山、奉天に展開して防空作戦に参加した。

そして同年11月、マリアナ方面からのB-29の空襲にさらされた本土防空のためにふたたび松戸に呼びもどされ、終戦まで関東地区防衛に活躍することになる。ここの写真はすべて本土移動前の意気あがるころのものである。

Ki-44II SHOKIs of 2nd CHUTAI, No.70 SENTAI

Type 100 Command Reconnaissance Plane at Hoten Air Field.

奉天飛行場の100式司令部偵察機2型。快速を利して敵戦闘機をまき、広大な大陸をかけまわって戦略偵察に活躍した100式司偵、今日の航空偵察機の大先輩でもある。手前の1機はエンジンを始動中、横開き式の風防が開かれている。

スピットファイアの戦闘記録

(最終回)

[上]シーファイアF.Mk.45。本機はスピットファイアF.21の海軍型で、キャッスル・ブロムウイッチ工場で作られた唯一のシーファイアでもある。F.21との違いは着艦フックをつけたのみで、ほかは大差がなかった。着艦索で痛めないよう、尾輪にガードをつけるなどの改造もされている。実戦部隊に配備されたのは戦後の1946年11月で、翌年にはカメラを積んだFR型も数機が造られて、第778スコードロンに装備されている。

[下]シーファイアF.Mk.46。本機はスピットファイアF.22の海軍型で、200機が発注されたが、F.45につづいてわずかに24機が造られたにすぎない。FR型にも1機が改造された。グリフォン61か64エンジンを積んで5翅のプロペラをつけたものと、グリフォン85エンジンに6翅のコントラ・プロペラを組み合わせたものがあったが、1947年4月以降は、トルクの関係で後者に統一されている。

［上・下］シーファイアF.47。本機はF.46の"主翼折りたたみ型"でもある。主翼の折りたたみ機構は生産に入ってから採り入れられることになったもので、最初は人力で折り曲げられたが、のちには油圧操作に改められている。写真上の機体PS944は2機造られた原型の1機で、スピン・テストなどに使われている。本機は実動部隊ではスピンは禁止されており、ダイブに入ってスピードが増えると、機尾が重くなる傾向があったという。本機を装備した第800スコードロンは、1949年から50年にかけて、マレーと朝鮮で実戦に参加している。

［右ページ上］スピットファイアMk.IXB水上機研究機。スピットの水上機型への改造の実験は、1940年以来、Mk.1、Mk.Vなどを使っていろいろと試みられているが、写真はその最後の研究機。本機でのテストを最後に、スピットの水上機型への試みは1945年初めに中止されることになった。

〔右・下〕スピットファイアF.22。シーファイアF.Mk.46のもととなった本機は、Mk.4～20の主翼を造改したMk.21とほとんど同じで、違いは電動装置のボルトが12ボルトから24ボルトに変えられたのみ。ほかは風防が水滴型に改められているのが外形上の特徴である。1945年3月に627機が発注されたが、生産されたのは260機。多くが補助空軍に装備されている。

〔上・下〕スピットファイアの最終型F. MK. 24。F. 22の航続力をのばし、ロケット・ランチャーを装備するなどの改造を施したもので、F.22の最後の27機からこのF.24として生産されている。しかし未完成の54機分の機体を残してキャッスル・ブロムウイッチ工場は閉鎖され、サウス・マーストン工場で最終組立てが行なわれたが、これはスピットファイアの最後の生産でもあった。本機の1号機が実戦部隊に配備されたのは1946年4月、最後の1機がロールアウトしたのは1948年の2月であった。
　本機は本国の防空部隊での使用を目的に作られたが、1952年に16機がホンコンに送られて就役しており、20機ほどが1956年頃まで軍籍にとどまっていた。

〔上・下〕アブロ・ランカストリアン。ランカストリアンは，ランカスター爆撃機の輸送機型。機首と尾部砲塔にカバーをして整形したもので，ＢＯＡＣが装備したのは1944年。翌45年５月31日から，同社の北大西洋路線それにカンタス航空と共同で運航したオーストラリアへの“カンガルー”サービスの定期路線に就役させている。同年７月には，本機でパース－シドニー間63時間の飛行速度記録をたてている。写真下の機体はＢＯＡＣが1945年に定期路線に就役させた最初の20機のうち１号機（G-AGLS）で，定期路線第１便としてヒースロー空港を離陸するところ。乗客は９－13人乗りであった。

エアラインの翼

ＢＯＡＣ　英国航空　④

イタリア軍用機写真集 ③

〔上・右〕先月号で紹介したマッキMC.205Vベルトロ戦闘機。本機は1943年8月，連合軍のシシリー上陸を迎撃した雷撃機の掩護に出たのが初出撃。このとき15機が出撃している。しかし同年9月にイタリーは降伏，そのときイタリー空軍には66機のベルトロが装備されていたが，その6機は連合軍側の手にわたっている。本機は休戦後も生産がつづけられ，総生産機数は262機。右と下の写真は降伏後編成されて，連合軍とともに戦った共和国空軍の装備機である。

〔左ページ下〕レッジアーネRe2001ファルコ戦闘機。このページ下のRe2000にドイツのDB601A-1（1,175HP）エンジンを付けた型で，Serie I，II，IIIは機銃の数がすこしずつ違った。Serie IVは胴体下面に600kg爆弾か増槽を懸架できた。

Re2001CN は夜間戦闘機で，20mm機関砲2門を装備し，150機が生産され，1943年から北イタリアの防空にあたっている。試作だけに終ったが，雷撃戦闘型のRe2001G，対戦車攻撃型のRe2001H も造られている。また，木製化したものも開発されていたが，実機は未完成のままに終った。

〔下〕レッジアーネRe2000ファルコI戦闘機。1938年に造られた全金属製の高速戦闘機で，アメリカのセバスキー系戦闘機とよく似ている。

986HPの空冷エンジンを付け，格闘性能はドイツのBf109Eより優かったといわれるが，中央翼の燃料タンクには防弾がなく，イタリー空軍には不採用となった。そのため，輸出型のRe2000 Serie Iを迎撃機としてスウェーデンやハンガリーに売っている。

本機のバリエーションとしては，1,025HPエンジンを付けたカタパルト戦闘機Re2000 Serie IIが1940年に12機造られ，貨物船や戦艦イタリアでテストを受けたが，生産には入らなかった。また長距離戦闘型のRe2000 Serie IVも造られ，シシリー島の防衛で活躍した。Re2000の生産機数は170機。

〔左ページ3枚〕アンブロシーニSS3研究機。1939年に造られ，SS4迎撃機の研究機となったカナード機。38HPの2気筒エンジンを機尾に付け，機首には昇降舵付き前翼を持ち，脚は固定だった。

（上）ブレダ65。戦闘機・爆撃機・偵察機の三つを一つの機体で兼用しようとして造られた機体で，ブレダ64でテストが行なわれたのちに生産に入った。主翼内には12.7mmと7.7mm機銃を1挺ずつ，合計4挺の機銃を持つほか，1トン爆弾を1発積むこともでき，これは単座機である。ブレダ65bisは複座機で，一部は油圧操作式旋回12.7mm機銃（回転塔）を付けていた。

第2次大戦が始まったときの空軍の保有機数は154機。しかし，北アフリカやバルカン方面で使ってみると，速度が遅いので敵戦闘機の絶好のえじきになることがわかり，限定された作戦にしか出撃しなかった。

〔下〕カプロニ・ビツラF.5戦闘機。1930年代の末に出現したイタリーの低翼単葉高速戦闘機群の一つで，870HPのフィアットA.74RC38星型14気筒エンジンを装備し，14機造られた先行生産型はローマの夜間防空にあたった。水平尾翼は取付角が変えられ，補助翼はフラッペロンで着陸のときにフラップと連動して下った。武装は胴体両側に12.7mm機銃2挺である。